国際研究論叢　31（2）：21 ～ 38, 2017

支配と服従の構図
―ソシオン理論による分析―

渡　邊　　太*

Patterns of Dominance and Submission: Socion network analysis of moral harassment

Futoshi Watanabe*

Abstract

This paper focuses on the network pattern of dominance and submission intrinsic to moral harassment from the perspective of socion theory. A socion denotes a functional knot in social networks. In a dyad, the socion's self-system forms a coupling of dominance and submission to explain the moral harassment relationship. In triads, the socion network balances when there are three positive relations, or two negative and one positive relations. A triad balance includes scapegoating. Therefore, the behavior of a third socion is important to rescue a victimized socion from harassment. I discuss the dynamics and formation of a triad complex consisting of four socions（the harasser, victim, and the third and fourth socions）and the structural conditions of harassment.

キーワード

支配、服従、モラル・ハラスメント、ネットワーク、ソシオン理論

Ⅰ　はじめに

人が人を支配する。人は支配もするし、服従もする。もちろん、支配もせず服従もしない関係性を結ぶこともできる。それでも支配し、服従する関係がなくなることはない。なぜか。

M. Weber は、支配を「挙示しうる一群の人びとを特定の（またはすべての）命令に服従させるチャンス」（Weber 1947 = 1967：1）と定義した。Weber は近代国家を念頭に、官僚制による合法的な支配の正当性を論じた。合法的な支配は、規則に拘束された公務を運営するために、権限の範囲内で行なわれなければならない。支配の業務に従事する者は、

＊　わたなべ　ふとし：大阪国際大学人間科学部講師〈2017. 9. 21 受理〉

没主観的に区切られた作業範囲のなかで命令権力を付与され、明確に限定された前提と手段のもとで権限を行使する（Weber 1947 = 1967：8）。

ところが、実際の官僚制組織においては、しばしば権限を逸脱した権力の行使が見いだせる。典型的な例としてハラスメントがある。ILO（国際労働機関）は、「仕事の流れの中でまたは仕事の直接的結果として、人が攻撃され、脅され、傷つけられる等の、適切な行為から逸脱したなんらかの行動、事件もしくは行為」をハラスメントとして定義している。また、厚生労働省では、職場のパワー・ハラスメントを「同じ職場で働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内の優位性を背景に、業務の適正な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与える又は職場環境を悪化させる行為」と定義する。いずれも「適切な行為から逸脱した」「業務の適正な範囲を超えて」とあるように、組織として付与された権限の範囲を外れたハラスメント行為が問題とされる。

本稿では、支配と服従の関係性について、社会 - 心理現象をネットワーク・システムとしてとらえるソシオン理論の枠組みから分析する[(1)]。以下では、持続的な支配と服従の関係を特徴とするモラル・ハラスメントについて概観した上で、なぜ支配と服従のハラスメント的関係が持続的に安定するのかについて、ソシオン理論の視点からアプローチする。

Ⅱ　モラル・ハラスメント

M. F. Hirigoyen は、相手を支配下に置いて精神的な暴力をふるい、相手の人格を傷つける行為をモラル・ハラスメント（moral harassment）として概念化した（Hirigoyen 1998 = 1999, 2014 = 2017）。モラル・ハラスメントは家庭や職場で発生し、犠牲者を精神的に痛めつけ、不当に扱われ侮辱されたという感情をもたらし、人間としての尊厳を奪う。

モラル・ハラスメントは、相手を支配下に置く段階と、支配下に置いた相手に暴力をふるう段階からなる。相手を支配下に置く段階は、（１）相手を惹きつける、（２）相手に影響を与える、（３）相手を支配下に置く、という３つの段階を辿る。

（１）の段階では、ハラッサー（加害者）は不幸な子ども時代を過ごしたとか自分が不遇にあることを匂わせて、犠牲者に「可哀想だ」とか「守ってやりたい」と思わせる。（２）の段階では、犠牲者の感情や弱みを突くことで巧妙に操作し、相手が望まないことをさせて、あたかも自発的にやったかのように思わせる。犠牲者は精神的に混乱し、その責めを自分自身に負わせてしまう。（３）の段階に至ると、犠牲者はハラッサーに心理的に束縛され、服従する他ない状態に陥る。犠牲者は抵抗する力を失い、ハラッサーの言いなりとなる。

こうして支配下に置かれた犠牲者に対して、ハラッサーは精神的暴力を思う存分にふるう。ハラッサーの暴力は、侮蔑、嘲弄、中傷、悪口、悪意あるほのめかし、言葉による攻撃など様々で、その目的は犠牲者の精神を破壊することである。

モラル・ハラスメントのコミュニケーションは、理解と共感をお互いにつくりあげるコミュニケーションとはかけ離れたものである。ハラッサーは相互理解に至るような対話を拒否し、相手を愚弄し、侮辱するためにコミュニケーションを歪める。わざと誤解を招く

ような言い回しを使ったり、犠牲者が発した言葉を意図的に歪めて受け取ってみせる。露骨に嘘を言うこともある。人前で犠牲者を侮辱し、冗談のふりをして悪意のある悪口を言いふらす。

これらはいずれも、「お前は駄目な人間だ」というメタメッセージとなって犠牲者を傷つける。ハラッサーは平気で嘘をつくし、言動も一致しないので、まともにコミュニケーションをとって誤解をはらすことは到底できない。しかもハラッサーは巧妙に自分の暴力を正当化する。犠牲者は、ハラッサーが自分にきつく当たるのは自分の行動に原因があると思わされている。自尊心を傷つけられた犠牲者は、たえず自分が悪いという自責の念に駆られている。ときに犠牲者が反撃に転じると、ハラッサーは大げさに傷ついたそぶりを見せて自分の方が被害者だと主張する。そのせいで犠牲者は罪悪感を抱き、自分自身を守る行動がとりづらくなる。

ハラッサーは、自己愛的な性格が変質的なまでに高まった人格をもつ（Hirigoyen 1998 = 1999：210）。そうした人物は、仕事や社会生活に適応し、一見したところふつうの人間に見えるが、自分を偉大に見せかけてより大きな権力を得るために平気で他人を利用する。自分を特別な存在だと信じ込んでいるが、自分ひとりでは確信できないので、他者からの賞賛と服従をたえず必要としている。内実の空虚な誇大自己を束の間でも実感するために、他者の犠牲を必要とするのである。

モラル・ハラスメントのコミュニケーションが犠牲者にとって破壊的となるのは、中傷や侮蔑の言葉がひとつひとつ孤立したものではなく、繰り返しぶつけられることで連続したひとつの暴力を形作るからである。身体的な暴力がなくても犠牲者の苦痛は際限なく大きくなる。犠牲者はハラッサーの支配下に置かれているために、支配と服従の関係から自発的に逃れることが困難である。こうした関係の呪縛がモラル・ハラスメントの厄介な点である。

支配と服従の関係は、なぜ強固なのか。外から見ていれば逃げ出せばよいのにと思える関係性なのに、犠牲者はかえってしがみついているように思える。以下では、モラル・ハラスメントに示されるような支配と服従の呪縛的な関係について、社会関係をネットワーク・システムとしてとらえるソシオン理論の視点から分析する。

Ⅲ　支配と服従のダイアッド

1　ソシオン理論

ソシオン理論は、内部モデルを組み込んだ荷重ネットワークとして個人と社会のダイナミックスを把握するパースペクティヴを提示する（藤澤 1997a, 1997b, 1998, 木村 1999, 2000, 2001, 2003, 雨宮 2001）。ソシオン（socion）とは、「社会的」を意味するソーシャル（social）と神経ネットワークのニューロン（neuron）を合わせた造語で、ネットワークの結び目としての行為主体を意味する。ソシオンは社会ネットワークの基本的な構成単位であり、日常的な意味での個人を指す場合もあるが、分析スケールに応じて集団、組織、国家もソシオンとしてとらえることができる。

個々のソシオンを結ぶ結合強度が荷重（semio-weight）である。荷重はネットワークを結ぶ量的な強度を抽象化した概念であり、正負（positive/negative）の分極性を有する。正の荷重は信頼、愛情、好き等を意味し、負の荷重は不信、憎悪、嫌い等を意味する。荷重量はソシオンとネットワークのふるまいに応じて増減し、荷重の正負もソシオンとネットワークのふるまいと変換ルールに応じて変化する。ソシオンは他のソシオンに荷重を送るとともに、他のソシオンからの荷重を受け取る相互依存的な関係に置かれている。さらに、自己自身に対しても再帰的に荷重を備給する。ネットワークで結ばれたソシオンの間を荷重が還流する。還流する荷重が安定するとき、ネットワークの構造も安定する。

ソシオン理論では、自己を単独で存立する「個人」としてではなく、ネットワークの結節点（knot）としてとらえる。私が何者であるかは、私が自分自身のことをどのように見ているかだけでなく、他者のまなざしに私がどのように映っているかによっても左右される。他者からのまなざしの一撃は、ときに私の存在を抹殺するほどに強い力を持つこともある。これを荷重ネットワークとして表現すると、自己から出て他者を経由して還流してくる荷重の流れが形成する相対的に安定したパタンがシステムとしての自己が成立したということになる。

ソシオンの自己システムは、次のように図示できる（**図１**）。ソシオンＡを自己、ソシオンＢを他者とする。ソシオンの自己システムは、単一のソシオンでは完結しない。他者のまなざしを含むダイアッド（２者関係）を形成してはじめて、自己システムが成立する。

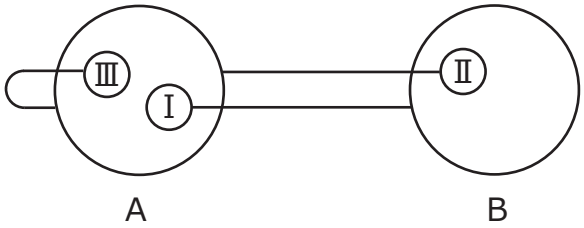


図１　ソシオンの自己システム
（出所）藤澤（1997a）をもとに作成

自己システムは荷重Ⅰ、荷重Ⅱ、荷重Ⅲの３つの荷重から構成される。荷重Ⅰは、内部に繰り込まれた他者の像に付与される荷重である。荷重Ⅰは「私から見たアナタ」の姿に相当する。荷重Ⅱは、他者の内に構成された私の像であり、「アナタから見た私」に相当する。私がアナタをどう見るか、そしてアナタが私をどう見ているか、この２つの荷重を受けて最終的に私自身に対する私の荷重が付与される。これが「私から見た私」の像であり、荷重Ⅲにあたる。

荷重Ⅰは、私が他者に対して抱く荷重であり、内部に取り込まれた他者の像である。自意識の始まりは他者の模倣である。荷重Ⅰは、私が出会った他者の数だけ私の内部に構成される。ただし、人はつねに知っている全ての他者を思い浮かべて生きているわけではな

いので、当面のコミュニケーションにかかわらない他者への荷重Ⅰは潜在化していると考えられる。

荷重Ⅱは、鏡に映った自己（looking-glass self）であり、他者のまなざしに映った鏡像的自己を意味する。鏡像としての私は、社会関係のなかでの私の姿をあらわしたものである。自己の確立が不確かな思春期には、他者によって付与される荷重Ⅱに右往左往するものだが、十分に大人になったとしても、鏡像的自己に全く揺さぶられない人は稀だろう。

荷重Ⅲは、自己に対して再帰的に付与される荷重であり、自己イメージをあらわしている。荷重Ⅲが正のときには自尊心、負のときには自己卑下の感情が自己システムに発生すると考えられる。

ソシオンAにとっての荷重ⅠはソシオンBにとっての荷重Ⅱである。同様に、ソシオンBにとっての荷重ⅡはソシオンAにとっての荷重Ⅰである。したがって、ソシオンのダイアッドには、A、B両ソシオンの自己システムを描き込むと、**図2**の通りになる。

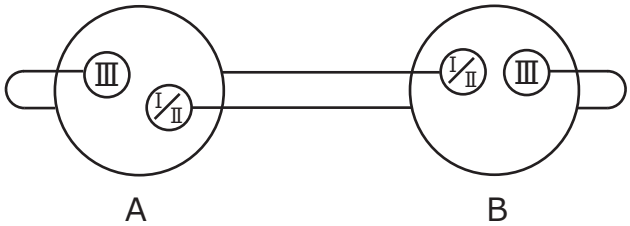


図2　自己システムのカップリング
（出所）藤澤（1997a）をもとに作成

2　自己システムの類型

ソシオン理論ではソシオンのトライアッド（3者関係）に作用する荷重の演算規則を仮定する。荷重の演算規則は、F. Heiderのバランス理論にもとづく（Heider 1958 = 1978）。バランス理論によれば、トライアッドは3つの正の関係か、2つの負の関係と1つの正の関係のときに安定し、バランス状態に至る。3つの負の関係か、2つの正の関係と1つの負の関係のときは不安定なインバランス状態となる。インバランスな関係にはバランス状態に向かう圧力が作用する。これがソシオンの演算規則となる。

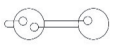
バランス状態は、わかりやすく言うとと3者関係で「友の友は友」「友の敵は敵」「敵の友は敵」「敵の敵は友」となる関係である。友をP（positive）、敵をN（negative）であらわすと、PPP、PNN、NPN、NNPがバランス状態として安定する。PPN、PNP、NPP、NNNはインバランス状態で不安定である。

バランス状態はなぜ安定するのか。小杉・藤澤・藤原（2004）はトライアッドを3×3の行列で表現し、その固有値を算出することでバランス状態がインバランス状態よりも情報量が縮減されていることを示した。すなわち、バランス状態はインバランス状態よりも関係構造としてシンプルで、認知的経済性に優れているのである。認知システムにおいて

情報量が少なくてすむことは心理的負荷が軽減され、効率的に環境を把握できる望ましい状態と考えられる。ここにインバランス状態よりもバランス状態を選好する心理作用の合理性がある。

さて、バランス理論をソシオンの自己システムに適用すると、3つの荷重が正負の2値をとるので2×2×2の8パタンができる（**表1**）。

表1　自己システムの8類型

バランス状態					インバランス状態				
ソシオグラフ	タイプ	荷重Ⅰ	荷重Ⅱ	荷重Ⅲ	ソシオグラフ	タイプ	荷重Ⅰ	荷重Ⅱ	荷重Ⅲ
	PPP	＋	＋	＋		PPN	＋	＋	－
	PNN	＋	－	－		PNP	＋	－	＋
	NPN	－	＋	－		NPP	－	＋	＋
	NNP	－	－	＋		NNN	－	－	－

（出所）藤澤ほか（2006）をもとに作成

バランス状態のうち、PPPは3つの荷重がすべて正である。荷重Ⅰが正なので「私はあなたを好き」、荷重Ⅱも正だから「あなたも私を好き」、荷重Ⅲも正で「私は私を好き」という好き好きずくめの自己システムである。

PNNは、「私はあなたを好き」（荷重Ⅰ＝P）だが、「あなたは私を嫌い」（荷重Ⅱ＝N）、そして「私は私が嫌い」（荷重Ⅲ＝N）である。好きな人に嫌われて自己嫌悪に陥るパタンといえる。

NPNは、「私はあなたを嫌い」（荷重Ⅰ＝N）だが、「あなたは私を好き」（荷重Ⅱ＝P）、そして「私は私が嫌い」（荷重Ⅲ＝N）である。嫌いな人から好かれて自己嫌悪に陥るパタンといえる。

NNPは、「私はあなたを嫌い」（荷重Ⅰ＝N）で、「あなたも私を嫌い」（荷重Ⅱ＝N）、そして「私は私を好き」（荷重Ⅲ＝P）である。嫌いな人から嫌われて、でも自己評価は正で自分が正しいと思っているパタンである。

不安定パタンは、どこか「腑に落ちない」という感覚をもたらす。PPNは好きな人から

好かれて自己嫌悪に陥るパタンである。PNP は好きな人から嫌われて嬉しいというパタンである。NPP は嫌いな人から好かれて喜ぶパタンである。NNN は嫌いなん人から嫌われて自分自身も嫌いという真っ暗なパタンである。

バランス状態の４つの安定パタンを比較すると、PPP と NNP は互いの間でやりとりする荷重に対称性がみられる。すなわち、P を送れば P が返り、N を送れば N が返ってくる。それに対して、PNN と NPN では、P を送れば N が返り、N を送れば P が返ってくるという非対称性がみられる。

愛情を送れば憎悪が返ってくる、あるいは憎悪すれば愛される、という非対称的な関係性は不自然にも思えるが、バランス理論によれば安定状態である。なぜか。謎を解く鍵は荷重Ⅲにある。ダイアッドで非対称的な関係で安定するのは PNN と NNP の２つだが、いずれも荷重Ⅲが負（N）であるという特徴をもつ。自己嫌悪や自尊心の欠如した状態にあるとき、厳しく接してくる他者に依存したり、他者からの愛情に憎悪で応じたりしてしまうこともあると考えれば、非対称的なダイアッドも理解できる。むしろバランス理論にしたがえば、当然そうなると考えることができるのである。

ソシオンの自己システムにおけるバランス／インバランスは、自己－他者－対象の３項関係を解く社会心理学の p-o-x モデルの表記に合わせて描くこともできる（渡邊 2005）。３つの荷重は、対象としての自己（me）に対する主体としての自己（I）および他者（You）からの評価に対応する。すなわち、I → You が荷重Ⅰ、You → me が荷重Ⅱ、I → me が荷重Ⅲである（**図３**）

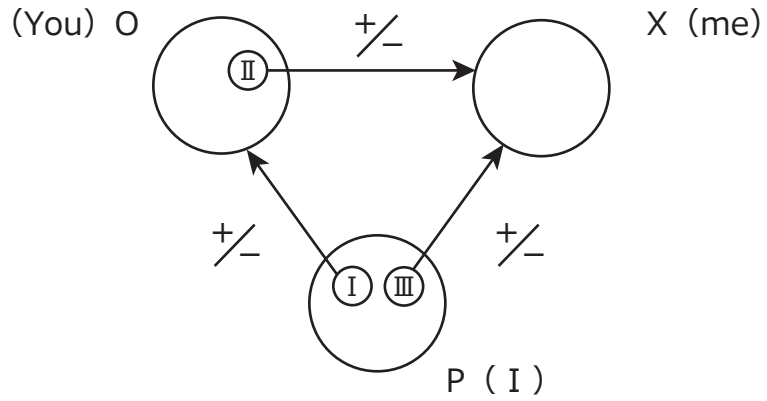


図３　自己システムのトライアッド表記
（出所）渡邊（2005）をもとに作成

３　自己システムのカップリング

次に自己システムを連結し、バランス状態を検討しよう。ダイアッドの双方ともにバランス状態になるパタンは、PPP × PPP、NNP × NNP、PNN × NPN（＝ NPN × PNN）の３パタンである（**図４**）

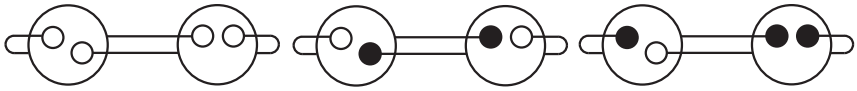


図４　安定カップリング
（出所）木村（2000）をもとに作成

PPP × PPP は、正の互酬的な関係をあらわす。互いに相手が喜ぶものを贈与しあう関係性である。相思相愛、相互の信頼関係である。

NNP × NNP は、負の互酬的な関係をあらわす。互いに相手が嫌うものをぶつけあう関係性である。互いが互いを憎みあいながら、自分は間違っていないと確信している。いわば、テロリストの心情に近いかもしれない。

PNN × NPN は、一方が負の荷重を送って正の荷重を受け取り、他方は正の荷重を送って負の荷重を受け取るという非対称的な関係である。図では右のソシオンが支配する側となり、左のソシオンが服従する側となる。支配者ソシオンは、攻撃することによって相手の服従を引き出すことができる。服従者ソシオンは、どれだけ相手に尽くしても返ってくるのは負の荷重ばかりという被虐待状態に置かれる。加害者と被害者、あるいはサディストとマゾヒストのカップリングである。厄介なことに両者の自己システムはバランス状態で安定しているので、関係を変化させることは容易でない。

被害者が蛇ににらまれた蛙のように身動きが取れず、傍から見ればそのような関係から逃げてしまえばよいのに、と思えるときでも逃げることをせずかえって加害者にしがみついてしまい、周囲の者を心配させることがある。PNN × NPN の自己システム・カップリングは、呪縛され逃れられない関係性を説明する。

Hirigoyen は、ハラッサーの性格を病的に自己愛的であると指摘した。ソシオンの自己システムでは、支配者ソシオンは荷重Ⅲが負である。つまり、自己愛ではなく自己嫌悪をもつ。だが、Hirigoyen のいう病的な自己愛者は自己を愛している（荷重Ⅲ＝正）というよりは、つねに自己への愛に飢えている。病的な自己愛者はけっして自分自身に充足せず、つねに他者からの賞賛と服従を要求する。それは、空虚な自己（荷重Ⅲ）がつねに負であり、あらゆる正の荷重を吸収してもなお暗黒であることをやめないブラックホールのようなものだからと考えられる。

Ⅳ　排除と連帯のトライアッド

１　トライアッドの力学

ソシオン・ネットワークは、有向または無向のソシオグラフで描かれる。有向関係は、方向性のある関係で「A は B が好き」等をあらわす。無向の関係は、「A と B は仲良し」のように方向付けをもたない（あるいは双方向的である）関係をあらわす（**図５**）。

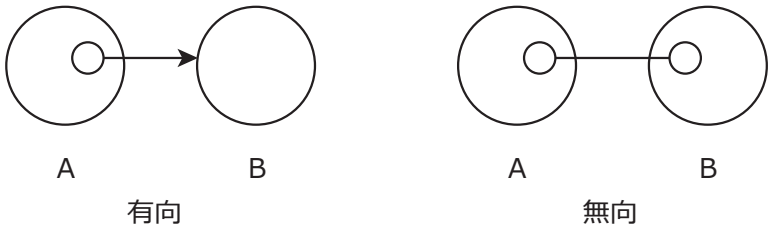


図５　有向と無向
（出所）藤澤ほか（2006）をもとに作成

バランス理論によれば、トライアッドは３つの正の関係か、２つの負の関係と１つの正の関係のとき、バランス状態となり安定する。有向無向を問わず一辺に一つの荷重を割りあて、時計回りに荷重の正負を記すと、バランス状態は PPP、NPP、PNP、NNP の４つである（**図６**）[(2)]。３つの負の関係、または２つの正の関係と１つの負の関係は不安定なインバランス状態であり、バランス状態に向かう傾向がある。

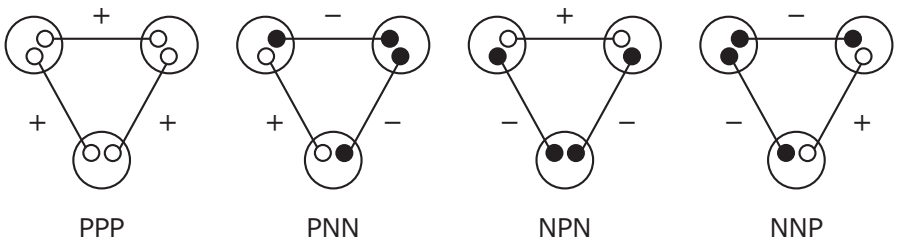


図６　トライアッドのバランス
（出所）木村（2001）をもとに作成

ソシオン理論では、他者の第３者に対する荷重を他者への荷重に重ね合わせる変換操作を「転移」と呼ぶ（藤澤 1997a）。転移には直列転移と並列転移がある。直列転移はパスが１方向の推移的な関係である。「友の友は友」「友の敵は敵」「敵の友は敵」「敵の敵は友」という４つのバランス状態は、「直列転移」による。これに対して、パスが２方向となるのは「並列転移」である。直列転移、並列転移いずれも、矢印の向きを入れ替えることで「正」「逆」が区別できる（**図７**）。

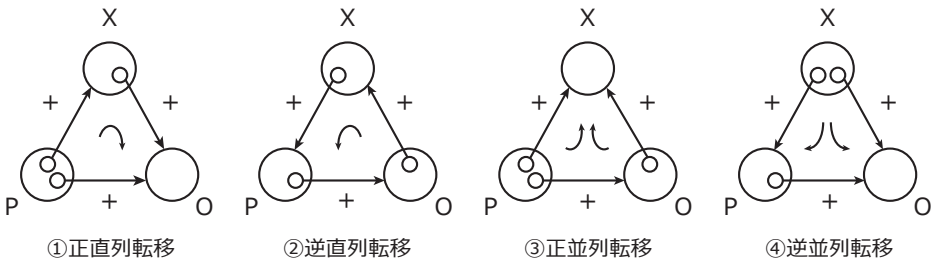


図７　直列・並列転移
（出所）藤澤ほか（2006）をもとに作成

図では、p の o に対する荷重が x を経由する転移をあらわす。正直列転移は時計回りに、逆直列転移は反時計回りに荷重が転移する。正並列転移は三角形の頂点に向かって、逆並列転移は三角形の頂点から下方に荷重が転移する。

トライアッドの力学は、荷重の向き、順序を区別することで多様な物語を紡ぎだす。先に負の荷重を送ったのが自己か他者かによって、関係の物語は違ったものになるだろう[(3)]。ネットワークで紡がれた物語は感情的に生きられる。ひとたび還流しはじめた荷重ネットワークは、バランス状態に至ると「そうかもしれない」という当初の予期が、「そうであるはずだ」「そうにちがいない」「そうでなければならない！」へと増幅し荷重が高圧化する。

トライアッドの４つのバランス状態のうち、３つまでは２対１に分かれて安定する。いいかえると、ひとりを排除することで残り２者が連帯するパタンである。トライアッドのバランスは、なぜ私たちが第３者の悪口をいいあうことで仲良くなれるのかを説明する。

トライアッドのソシオンそれぞれを加害者・被害者・第３者として性格づけると、加害者と被害者のあいだは負の関係で固定される。第３者は、バランス状態を実現するためには、加害者に荷担して被害者に負の荷重を送るか、反対に被害者に荷担して加害者に負の荷重を送るか、いずれかをとるしかない（**図８**）。

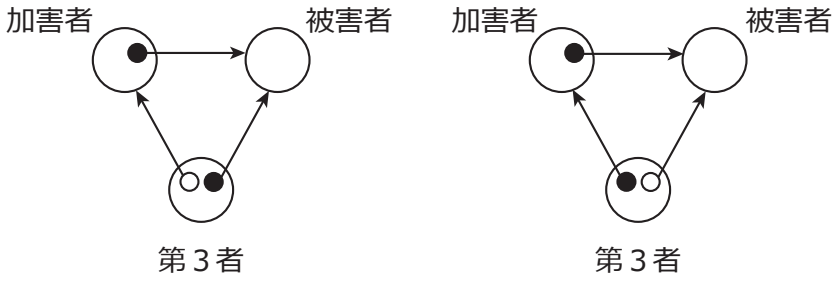


図８　第３者の立場
（出所）木村（2001）をもとに作成

第３者が加害者に荷担すると、被害者は孤立し被害はますます深刻化する。職場や学校でのハラスメントでは被害者の孤立が事態を深刻化させる。第３者がどう動くかは、ハラスメントの展開にとって決定的に重要である。

２　トライアッド複合

第３者のふるまいは、２者間の加害・被害関係にとって重要だが、第３者が加害者側についたとき被害者が孤立して事態は膠着する。この関係性を打開するには、第４者による介入が必要となる。４者関係は４つのトライアッドの複合（triad complex）からなる[(4)]。４つのトライアッドすべてが安定状態になるのは、（１）４者すべてが正の関係で結ばれる場合、（２）４者が２対２に分かれる場合（分裂結合）、（３）４者が３対１に分かれる場合（排

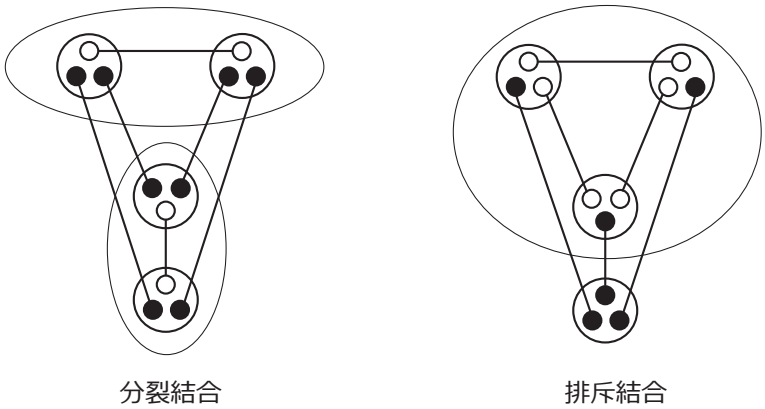


図９　分裂結合と排斥結合
（出所）木村・松尾・渡邊（2001）をもとに作成

斥結合）の３パタンである（**図９**）。

ここで、加害者（ハラッサー）・被害者（犠牲者）・第３者・第４者のトライアッド複合を想定し、関係の構図を明確化するために無向ソシオグラフとして描く。図中では加害者をＨ（harasser）、被害者をＶ（victim）、第３者をＴ（third socion）、第４者をＦ（forth socion）と略記する（**図 10**）。

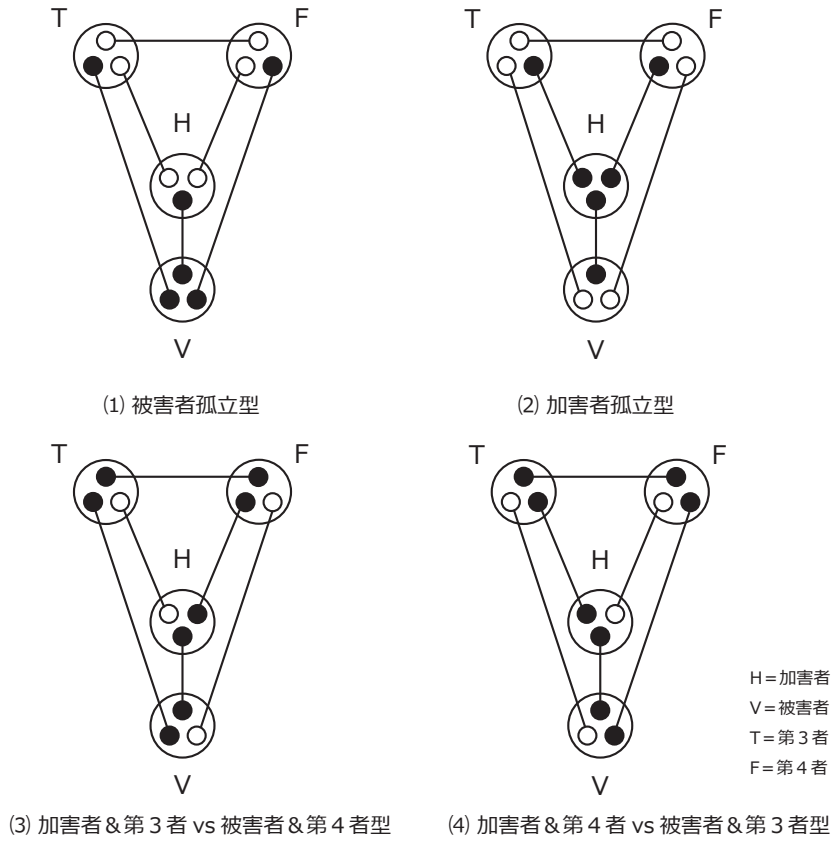


図 10　トライアッド複合

（出所）木村・松尾・渡邊（2001）をもとに作成

加害者と被害者の間を負の関係として固定すると、トライアッド複合のバランス状態は、（1）被害者孤立型、（2）加害者孤立型、（3）加害者 & 第 3 者 vs 被害者 & 第 4 者型、（4）加害者 & 第 4 者 vs 被害者 & 第 3 者型の 4 パタンである。

具体的な場面を想像しやすいように、第 3 者と第 4 者を性格づけよう。学校でのアカデミック・ハラスメントとして、ゼミの教員が加害者、学生が被害者のケースを考える。第 3 者は同じゼミに所属する同級生の学生であり、第 4 者は同じ学科の他の教員とする。ここでは、第 3 者は加害者になびきやすく、第 4 者は相対的に加害者を抑止できる力をもつ行為者を想定した。

（1）被害者孤立型では、ゼミの同級生も教員に荷担して被害者を糾弾し、他の学科教員もゼミ教員の言い分を鵜呑みにして、被害者である学生こそが問題行動をおこしているかのように思ってしまっている。被害者の孤立は深刻である。

（2）加害者孤立型では、（1）とは反対に、ゼミの同級生も学科の教員も被害者を支援し、加害者の行動が問題だと考えている。この場合、被害者を救出する介入はおこないや

すいと考えられる。

（3）加害者 & 第 3 者 vs 被害者 & 第 4 者型では、加害者であるゼミ教員とゼミ学生が結託し、被害者の学生を責めている。それに対して、被害者の学生は他の学科教員に相談している状態である。教員が被害者学生の支援にまわっているため、加害者による行動を抑止できる可能性がある。だが、ゼミ内では学生は孤立した状態であり、苦境に置かれている点は変わらない。

（4）加害者 & 第 4 者 vs 被害者 & 第 3 者型では、加害者である教員と他の学科教員が結託し、被害者の学生の方が問題行動を起こしているとみなしている。それに対して、ゼミ学生は被害者の味方となり、同情を寄せている。被害者の学生は孤立を免れてはいるものの、相対的に権力関係の上位にある教員が加害者側についているため、第 3 者の協力があったとしても被害者を救済することは容易ではない。

第 3 者と第 4 者が加害者に荷担するか、被害者を支援するかでハラスメントの展開は変わる。一般に、加害者が強い立場にある場合、被害者の言い分と加害者の言い分が食い違っていれば被害者の言い分は却下されやすい。第 3 者、第 4 者は慎重に被害者の置かれた状況を確認する必要がある。

3　ハラスメントの背景

ハラッサーは、支配と服従の自己システム・カップリングで、負の荷重を送ると正の荷重が返ってくるという非対称的関係のなかで、暴力が愛情をもたらす快楽を学習する。犠牲者は、支配と服従の自己システム・カップリングのなかで、憎しみと暴力をもたらす相手に愛情を注いでしまうという自己犠牲の関係を絶望の内に生きる。

さらにトライアッドの力学において、ハラッサーは犠牲者を孤立させるために周囲の人々を巻き込んでいく。孤立した犠牲者は、現在の境遇が逃れられない運命的なものに思われて絶望する。そして、こんなふうになってしまったのは自分が悪いせいだ、と自己非難を繰り返し、ハラスメントの泥沼から抜け出せない。

Hirigoyen（1998 = 1999）によれば、職場のモラル・ハラスメントは企業の対応によって抑止することもできるし増長されることもある。現場でのモラル・ハラスメントに対して企業が寛大な態度をとっていると、ハラッサーはお墨付きが与えられたと考え、ますますハラスメントに邁進するし、ハラッサーでなかった同僚たちもハラスメントに駆り立てられる。さらには、企業が労働者を管理するために意図的にモラル・ハラスメントの方法を用いることさえある（Hirigoyen 1998 = 1999：148）。

モラル・ハラスメントが起こりやすい産業分野として、Hirigoyen は、介護、看護、教育の分野をあげている（Hirigoyen 2014 = 2017：58）。これらの分野は、人間関係の負担や奉仕の重さが過大であり、そのなかで個人が弱い立場に置かれやすいためである。また、評価システムが曖昧で属人的な評価が横行しやすい点でも、犠牲者が生み出されやすい[(5)]。

教育の現場においてハラスメントが生まれやすい背景について、ここでは私自身がいくつかの大学で勤務するなかで見聞してきた事例を手掛かりとして考察したい[(6)]。いくつかの事例をあげるが、これらは複数の証言をミックスして再構成したものである。それ自体

としてはフィクションだが、事実から遊離したものではない。

【事例１】 大学２年、女性。アニメーションのキャラクターのコスプレ（仮装）を趣味とする。それを知った学科教員から、学内イベントの際にコスプレをしてスタッフとして参加することを提案され、引き受ける。その時は楽しかったが、その後もコスプレの依頼が度重なるうちに重荷に感じられる。イベントの参加報告が授業のレポート課題とされたので、単位のためにも断りにくい。

【事例２】 大学４年、男性。ゼミ教員に卒業論文の草稿を見せるが全く評価されず、書き直しを命じられる。どこをどう書き直してよいのかわからず質問すると、「わからないのは、いままで真面目に勉強しなかったせいだ。自分で考えろ」と言われ、途方に暮れる。何度か書き直してゼミ教員に見せるが、その都度ダメ出しばかりされる。「お前はもう無理だから書くな」と通告され、ゼミの SNS グループで、「もう○○（本人の名前）には卒論が書けないので、皆で手伝って代筆してあげてください」と投稿された。

【事例３】 大学４年、女性。ゼミ教員から、ゼミ旅行に参加しないと単位を出さないといわれる。経済的な事情から、長期休暇中はアルバイトを休むことが難しく旅行に参加できない旨を伝えると、「じゃあ、（卒業まで）もう一年かかるな」と脅される。旅行は授業ではないから休んでもよいのではないかと尋ねるが、「ゼミ行事だから参加は必須」といわれ言われ不安になる。卒論は指導してもらいたいが、教員の態度には不信感を抱いている。

【事例４】 大学３年、男性。度重なるゼミ教員からの理不尽な暴言（「お前はクズだ」「どうせ卒論も書けないだろ」等）に耐えかねて学生相談室を訪れて相談したが、後日、相談室員とゼミ教員との３者面談を設定され、その場でゼミ教員から、いかに自分がダメ学生であるかを延々と説教された。相談員から、「それについて反論は？」と尋ねられたが、ゼミ教員に対して面と向かって発言することはできず、結局、コミュニケーション不足による学生の誤解として処理された。

事例１では、学生はサブカルチャー的な趣味を肯定的に評価されて嬉しく思ったが、教員の要求がしだいにエスカレートするに連れて気持ち悪くなる。いったんは教員を信頼したものの、途中からついていけなくなった。間接的に単位取得とも関連するため、断りたくても断れない。事例２、３、４は、卒論ゼミでの問題である。学生は、書きたい卒業論文の研究テーマに応じてゼミを選択している。ゼミ教員に対して信頼と敬意を抱いていたにもかかわらず、学生からすると理不尽に思える攻撃にさらされ、傷ついたケースである。

４つの事例に共通するのは、当初は学生が教員に対して信頼、敬意、好感を抱いていたが、後にはそれらが損なわれるという点である。学生からすると「裏切られた」という感じを抱くかもしれない。

また、いずれの事例でも学生にとっては、教員の言い分が正しくて自分が間違っているのではないかという不安が容易には消せない。教える立場と教わる立場という関係性にお

いて、教える側が確信的に言葉による攻撃を加えてくると、教わる側にある者は自分が間違っているからだと思わされる。北仲・横山（2017）は、文系の研究室では個人の価値観や生き方など「ディープな問題」が教育に絡みつくため、教員と学生の価値観や思想の「近さ」が教員による全人格的な支配をもたらしやすい点を指摘している。

加害者と被害者を対面させて、一方的に加害者の主張を被害者にぶつけさせる事例４の対応は、被害者からすると絶望的である。加害者はますます調子に乗ることだろう。事例４のような相談室の対応は、ハラスメントの問題を学生と教員の間のトラブルにすり替えてしまう。だが、教員と学生は対等な関係ではない。被害者と加害者を対面させることで、二次的な被害さえ生じかねない危険な対応といえる。

卒論ゼミでの指導は特に、専門性もかかわるので他の教員からも口出しされにくい。そのため、教員が本来の範囲を逸脱して学生に対して権限を行使する機会にも恵まれる。事例３のような公私混同が甚だしい事案も、教員からするとゼミの公式行事だから単位に関連させるのは当然と思えるのかもしれない。

そもそも教員が「卒業させない」と学生を脅すことは間違っている。教員は学生を指導して卒業させる義務を負うのであり、卒業を阻止する権利を持つのではない。「卒業させない」というフレーズは、教員が決して口にしてはならない言葉である。事例２のように卒論執筆を禁じることは、学生の指導を放棄するばかりでなく、学生の学ぶ権利を侵害するものでもある。

学生からハラスメント的な行為を指摘されたときに教員が口にする言い訳は大体決まっている。「悪いのは学生の方だ」と学生を責めるものである。教員からすると、言うことを聞かずゼミの調和を乱す学生が悪いのであり、よくできた卒論が書けない学生の方が悪いのだ。迷惑を受けているのは教員の側だといいたいかのようであるアピールする。ハラッサーは、あたかも自分の方が被害者であるかのようにふるまう。事情を知らない他の教員は、当該教員の言い分を真に受けて学生が面倒を起こしているのだと信じ、結果として犠牲者は孤立する[(7)]。

問題が教員の側ではなく学生の側にあるとみなされるのは、大学という場全体の雰囲気にもかかわる。中小零細の私立大学では、学生を馬鹿にする教員が少なくない。むしろ多数派を構成するかもしれない。授業中の私語が止まない、レポート課題をやってこない、ゼミを欠席する等、学生に対して文句を言いたい気持ちはわからなくもない。それでも、教育を職務とする以上、学生を馬鹿にしたり、学生の出来が悪いといって指導を放棄したりすべきではない。学生がハラスメントを訴えたとき、当の学生が問題行動をしているとみなされてしまう背景には、大学全体に面倒事を引き起こす厄介な存在として学生をみなす視線が蔓延していることもかかわる。

教育の場におけるハラスメントは、教育指導がゼミという密室的環境で行なわれることと、教員と学生という非対称的な関係のなかで、しかも学生が厄介な存在としてあつかわれている状況において起こりやすくなっていると考えられる。ゼミにおいては教員が学生に対して行使する影響力は強くなりがちで、排除のトライアッドも成立しやすい。犠牲者が孤立すると、被害は闇に葬られる。

企業でのハラスメントが労働者を消耗品として使い捨てることが常態化している職場で深刻化するように、人を人として扱えない環境はハラスメントを促す。度重なる大学改革によって教員に対する業績評価の圧力が強まりつつある。自分の業績を上げるために学生を利用しようとするインセンティブは高まる。上から評価される鬱屈を、下に向けて発散する欲望も渦巻く。現場は荒れている。自分は関係ないと思っていても、ハラッサーに荷担しお墨付きを与えているかもしれない。犠牲者になりやすい立場に置かれた人たちへの想像は尽くしても尽くしすぎることはない。

Ⅴ　おわりに

モラル・ハラスメントの特徴は、支配と服従の持続的関係がつくられた上でハラスメントがおこなわれる点である。ハラッサーは、犠牲者を魅惑し、影響を与え、支配下に置いた上で精神的暴力をふるい、犠牲者の尊厳を破壊する。

ハラッサーがもともと犠牲者に対して権力を行使できる立場にいるとき、ハラスメントは発生しやすい。本来、官僚制の合法的支配においては権限の範囲が限定されているはずだが、人ははみ出し、逸脱することを抑えられない。

官僚制組織は所与の目的を合理的に遂行するが、組織が大きくなると不測の事態に対して臨機応変に対応するには身が重過ぎる。原則は原則としつつも現場レベルで柔軟に対処することで急場をしのぐことはできるが、それがつづくと現場での拡大解釈が横行し、責任と権限のシステムが浸蝕される。

経済成長が安定的につづいて先の見通しが立ちやすければいいが、そうでなく激変する環境のなかで臨機応変に対処していく必要に迫られた組織では、権限の逸脱が生まれやすい。その隙間はハラスメントが発生する余地でもある。次々と押し寄せる火急の事態に対処しなければならない状況は、戦時下にも似ている。戦時下では、どさくさに紛れて制限された権限の範囲を超えて権力を行使したい欲望が解放される。タガが外れるのだ。

急場をしのぐためにという言い訳は用意されている。非常時に際して厄介な仕事を押し付けられて自分の方が迷惑しているという顔をしながら、欲望を剥き出しにして他者に矛先を向ける。その一方で、自身の悪行が暴かれることがないように慎重に保身の方策を練っている。保身の身振りと剥き出しの欲望は、ハラッサーに特徴的である。

ソシオン理論は、ダイアッドにおいて支配と服従の自己システムがカップリングすることを説明する。バランス状態は認知的経済性に優れるため、他の関係の可能性を想像し、実現することを遠ざける。トライアッドのソシオン理論は、ハラッサーが第３者を巻き込んで犠牲者を孤立させる関係を説明する。第３者がどちらにつくかによって、組織内でのハラスメントを抑止できるか増長してしまうか、異なった結果を招く。さらに、４つのトライアッドからなる４者関係（トライアッド複合）では、３対１の排除か、２対２の敵対的対峙で全体がバランス状態に至る。犠牲者を孤立から救うわずかな可能性を実現するためにも、第３者、第４者の挙動は決定的に重要である。

ソシオンはネットワークの結節点である。ネットワークの安定状態のなかで、犠牲者は

苦しみ、ハラッサーは欲望を充足する。バランス状態とは、誰にとっても快適な状態を意味するわけでは決してない。犠牲者を救うには加害者の欲望を挫いて、ネットワーク・システムを別の形に組み換えなければならない。くり返すが、第３者、第４者のふるまいが問われる。

註

(1) ソシオン理論は、1990 年前後から当時関西大学に所属していた木村洋二（社会学）、藤澤等（社会心理学）、雨宮俊彦（人間工学・認知心理学）の３者による共同研究として始まった。当初は、ニューラル・ネットワークのアナロジーでソーシャル・ネットワークの動作を分析することを目指していたが、共同研究の進展と共に個々の個体に還元できないネットワーク・ダイナミクスをシステム論的に記述・分析する概念の精緻化とモデル構築へ向かった。

(2) ＡはＢを好きだがＢはＡが嫌い、という非対称的な関係も実際には出現する。トライアッドの３辺を有向関係で表記すると、合計６つの矢印が含まれる。だが、人はつねに６つの関係性を考慮してトライアッドの人間関係を生きているわけではない。多くの場合、無意識ないし前意識的な情緒的評価として「好き」「嫌い」「好かれている」「嫌われている」といった関係を生きている。非対称性が生きられるのは、他者の認知と自他の認知が異なることを意識するメタレベルでの思考の段階においてである。人間の限られた情報処理能力では、メタレベルの思考をつねに作動させつづけるのは非効率的であり、通常は認知的経済性に優れた感情的判断が優先されているはずである。本論では、議論をシンプルにするために、基本的にはメタレベルの思考に至る手前の直感的に生きられる関係性の水準を対象とする。ソシオン理論では、直感的・感覚的に生きられる関係をサブレベル（サブスペース）とし、自他のサブレベルを繰り込むことで生まれる高次のレベルをメタレベル（メタスペース）として区別し、さらにサブレベルの基盤となる物質的に生きられる関係をオブレベル（オブスペース）とする３層構造を想定する（木村 1999, 2000, 2001）。

(3) 木村（2001）はさらに、荷重の正負（PPP, PNN, NPN, NNP）と左辺・右辺の荷重の向き（4 × 4）を区別した基本 16 類型をもとに、順序（推移・反射・誘導）と対辺の荷重の向きを区別した 96 類型（4 × 4 × 3 × 2）のトライアッド・パターンを分析している。

(4) 木村・松尾・渡邊（2001）は、学校教室でのいじめについて、加害者・被害者・教員・クラスメイトからなるトリオン複合を類型化した。木村・渡邊（2001）は、カルト宗教への入信と脱会をめぐって、教祖・信者・家族・救出カウンセラーのトリオン複合を分析した。渡邊（2007）は、職場のハラスメントを分析するために、加害者・被害者・使用者・第４者（同僚、上司、労働組合、相談機関等）からなるトライアッド複合を類型化した。

(5) 北仲・横山（2017）は、アカデミック・ハラスメントの背景として、①教育指導関係であること、②研究や高度に専門的な教育という活動に特有の被害や加害があること、③専門職や専門家の集団のなかに権力構造があること、④大学やアカデミックな世界における「常識」の作られ方や意思決定の方法に独自性があることの４点を指摘する。

(6) ここでは過去の職場も含めて主として人文・社会科学系の学部・学科で私が勤務するなかで、得られた情報を素材としている。ハラスメントとして学生が訴えた事例だけでなく、結果として犠牲者が泣き寝入りした潜在的な事例も含まれる。

(7) 波風を立たせたくない日和見主義的教員は、同僚のハラスメントを横目で見つつ、指導が熱心な余り行き過ぎて学生との間でトラブルになった話として矮小化する。そこにも、学生に原因を帰属させたい教員の欲望が垣間見える。

参考文献

雨宮俊彦　2001 『相互作用で解く心と社会――複雑系・ソシオン・視覚記号』、関西大学出版部.
藤澤等　1997a 『ソシオン理論のコア』北大路書房.
――― 1997b 『複合システムのネットワーク論』北大路書房.
――― 1998 『関係科学への道』北大路書房.
藤澤等（監修）・小杉考司・藤澤隆史・渡邊太・清水裕士・石盛真徳　2006 『ソシオン理論入門――心と社会の基礎科学』北大路書房.
Heider,F.　1958　*The Psychology of Interpersonal Relations*　Newjersey：Lawrence Erlbaum Associates.（= 1978　大橋正夫訳『対人関係の心理学』誠信書房 .）
Hirigoyen, M. F.　1998　Le harcèlement moral: La violence perverse au quotidian　Paris　La Découverte et Syros.（= 1999　高野優訳『モラル・ハラスメント――人を傷つけずにはいられない』紀伊國屋書店 .）
――― 2014　Le harcèlement moral au travail　Paris　Press Universitaires de France.（= 2017 大和田敢太訳『モラル・ハラスメント――職場におけるみえない暴力』白水社.）
木村洋二　1999 「ソシオンの一般理論（Ⅰ）」『関西大学社会学部紀要』30（3）65-126.
――― 2000 「ソシオンの一般理論（Ⅱ）」『関西大学社会学部紀要』31（2）63-149.
――― 2001 「ソシオンの一般理論（Ⅲ）」『関西大学社会学部紀要』32（2）1-104.
――― 2003 「ソシオンの一般理論（Ⅳ）」『関西大学社会学部紀要』34（1）1-44.
木村洋二・松尾茂樹・渡邊太 2001 「イジメのモードとネットワークの力学――排除のソシオン理論をめざして」『関西大学社会学部紀要』32（2）177-204.
木村洋二・渡邊太 2001 「親・子・カルトのトライアッド――信者と家族と教団のソシオン・ネットワーク分析」『関西大学社会学部紀要』32（2）105 ～ 175.
北仲千里・横山美栄子　2017 『アカデミック・ハラスメントの解決――大学の常識を問い直す』寿郎社.
小杉考司・藤澤隆史・藤原武弘　2004 「バランス理論と固有値分解」『理論と方法』19（1）87-100.
Weber M.　1947　Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der Sozialökonomik, Ⅲ. Abteilung, J.C.B. Mohr　Tübingen 3. Aufl.（= 1967　濱島朗訳『権力と支配』有斐閣.）
渡邊太　2005 「ネットワークにおける感情論理の分析――ソシオン理論のアプローチ」『大阪大学人間科学部紀要』 vol.31　85-110.
――― 2007 「非正規雇用化のなかの職場環境とプレカリアートの創造性」『職場トラブルについて考える』2004-2006 年度科学研究費補助金研究成果報告書（課題番号 16330003）215-239.